様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２４３０

研究課題名（和文）異文の発生・定着に見る読み手の欲望と書き手の文体の傾向性との考量についての研究

研究課題名（英文）Study of comparison between the variant text in which we can find out how its readers wanted to read and its composer's style

研究代表者
佐竹　保子（SATAKE, yasuko）

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：２０１７０７１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、謝霊運「登江中孤嶼」詩の異文「亂流趨孤嶼」と「亂流趨正絶」を、異文研究のテストケースとして取りあげた。近年、異文のうちの前者が支持されてきたが、その根拠を仔細に検討すると、成立しないことが分かった。また、後者は、当該作者によって書かれた詩文の文体の傾向性と合致すること、後者を支持する読み手が、詩句の背後に仏教の物語を読み取っていたことを、明らかにした。

研究成果の概要（英文）：　We took Xie Ling-yun's poem Deng Jiang zhong Gu-yu 登江中孤嶼 (Climbing an island in the river) as a testcase for the study of variant text, it has two variants “Qu Gu-yu趨孤嶼” and “Qu Zheng-jue趨正絶”. In recent years, many students of Chinese Literature wrote the former was right, but we found there are few evidences to make the former sound. We also found that the latter's style accords with Xie Ling-yun's other compositions', and some students who preferred the latter to the former have read it by Buddhism thought.

研究分野：中国文学

キーワード：中国文学　中国思想　謝霊運　山水詩　仏教　異文　修辞

１．研究開始当初の背景

印刷術発明以前、写本によって書籍が伝えられていた時代、同一テキスト内の「異文」は、印刷術発明以後よりもはるかに多かった。有名な例に、陶淵明（365 頃～427 頃）の「飲酒」詩其五の第六句目「悠然望南山」がある。多くの資料（6 世紀初期の『文選』、9 世紀前半の白居易「效陶潛體」、唐の陸曜作と伝えられる「六逸圖」等）が 3 字目を「望」に作るのに対し、7 世紀前半の『藝文類聚』は「見」に作る。やがて 11 世紀後半の蘇軾が「『望』では詩の神気が失せる」と断言して、該字は「見」に定着してゆく。

「異文」の研究それ自体は、古来、文献学における本文批判の基盤になってきた。洋の東西を問わず、特に経典を解読する折に、異文の輯集と検討は不可欠であり、それによって「正しい」「本来の」原文に辿り着けるとされてきた。

しかし文学は、それが読まれることによって、初めて成り立つ。20 世紀後半に盛行した読者論や受容論は、その事をくり返し説いてきた。そして異文や、物語の本筋から離れた所謂スピン・オフの逸話を対象として、それらを担った語り手・聞き手達にもっぱら焦点を合わせ、彼らの様態を検討することによって、文学の生成・発展を論じようとする研究は、中国文学の分野では、おもに 13～14 世紀以降の戯曲や白話小説等の俗文学のジャンルで、行われてきた。

本研究は、上記の方法を、古典詩文という伝統的な雅文学に適用しようとするものである。古来培われてきた精密な異文研究を土台にして、研究の焦点を、本文精読とともに、異文を支持し伝えてきた読み手達にも合わせ、書き手と読み手が相俟つ文学の生成論を考究せんとする。

そのテストケースとして謝霊運（385～433）を取り上げた。謝霊運は、六朝時代、先述した陶淵明を凌ぐ詩人とされ、今も、山水詩の開拓者として文学史上に重要な位置を占める。謝霊運を取り上げる第一の理由は、彼の詩句に大きな揺らぎがあるにもかかわらず、陶淵明のように詳細な検討に付されてこなかった点、にある。第二の理由は、山水詩の源泉である謝詩に言及する読み手が、歴代数多いことである。つまり検討すべき課題も資料も、この時代にしては豊富である。第三には、報告者自身が謝詩についてすでに 7 篇の論文を発表しており、未知の研究対象ではないことが挙げられる。

２．研究の目的

写本の時代から伝えられた古典詩文の異文を研究対象として取り上げ、それら異文を支持し伝えた読み手達の、そう読みたいという欲望と、その欲望を裏打ちする彼らの学識・見識・詩人像・文学観を探る手だてとして、異文をとらえる。その上で、書き手と読み手とが相俟って文学を生成する契機として、異文研究を方法論化することを、第一の目的とする。

また、具体的な詩文に対する読み手の欲望や学識・見識をはかる以上、その詩文の文脈や修辞の特殊性・特有言語等については、精密に把握しておく必要がある。本研究は謝霊運を取り上げるので、謝霊運詩文の文脈・修辞・言語や、その思想的背景を捉えることを、第二の目的とする。

３．研究の方法

基礎作業として以下の【A】が、中心的作業としては【B】が、必須となる。

【A】『文選』『藝文類聚』、および今は散佚した当時の別集を、書誌学的文献学的に考究する

【B】現代までの謝霊運詩文の読み方の蒐集と、それらに内在する欲望や希求について考究する

さらに、【B】を考究するには、読み手達の読みのいかなる部分が膨らみや余剰であり、いかなる部分が不足や見落としであるのかを、測ることができなければならない。つまり、対象となる具体的な詩人・詩句における文学的特性や思想的特性を熟知している必要がある。よって以下の【C】【D】の要件も不可欠である。

【C】Bの読みの対象となる詩人における修辞・詩語等の特性を、把握する

【D】Bの読みの対象となる詩人における宗教的思想的特性を、把握する

４．研究成果

テストケースとして取りあげた謝霊運（385～433）作品には、「登江中孤嶼」詩に異文がある。全十四句の第五句目を、李善（7 世紀）注系『文選』は「亂流趨正絶」に作る。これに対し、五臣注系『文選』（8 世紀初に上進）と『藝文類聚』（624 年上進）は「亂流趨孤嶼」に作る。この部分のテキストは、いずれも 12 世紀以後の版本しか残っていないが、それらから推測しても、唐代の写本時代にすでに両様存在したと考えられる。

「正絶」と「孤嶼」は一見些細な異文のようだが、該詩の六句目が「孤嶼媚中川」と続くために、「亂流趨孤嶼」であれば、梁章鉅（1775～1848）の説くとおり「下句に上字を重ね」る、現代修辞学にいう「頂真格」の修辞を用いていることになる。この修辞を、梁氏は「古詩に常に有り」と、謝霊運の時代に常用されたとする。

しかし、(1) 本当に「古詩に常有」なのか。(2) 謝霊運詩文においてはどうか。(3) 頂真格を用いたことによって、詩篇にいかなる効果が生じ、あるいは消滅することになると、歴代の読み手たちが考えてきたか。具体的には、以上が主要な論点となる。

1 年目の 2015 年は、(1)(2) に軸足を置き、最古の詩集である『詩経』以来の頂真格が、三類に大別できることを示した。第一類は、

頂真格の語の初出が押韻句で、次聯が換韻するケース。第二類は、頂真格の語の初出は押韻句であるが、次聯が換韻しないケース。第三類は、頂真格の語の初出が非押韻句で、同一聯内で語がくり返されるケースである。

三類をかりに図示すれば、以下のようになる。長方形が一句を表し、読点が付されたそれを非押韻句、句点が付されたそれを押韻句とする。換韻は「』」で表す。●が、頂真格の語の、初出と再出である。

第一類

□、◐。』◐、□。

第二類

□、◐。◐、□。

第三類

◐、◐。

頂真格の特性は、断絶の中の連続にある。頂真格の語は別々の句に置かれるから断絶がある。しかし同じ語を直近にくり返すから、連続性を感じさせる。その断絶と連続の絶妙なバランスが、頂真格の修辞の本領である。魏聰祺「頂真分類及其解析」2006 年が指摘するとおり、頂真格は「橋梁」（かけはし）の効果を持ち、その効果は、両端の断絶が大きいほど際立つ。

上の三類で、句間の断絶がもっとも大きいのは第一類、次が第二類であり、第三類においては、断絶性よりも連続性が前面に出て、ややバランスを失する。そして「登江中孤嶼」詩の、五臣注系『文選』や『藝文類聚』の収める異文「亂流趨孤嶼、孤嶼媚中川」は、第三類に属す。

第一類は『詩経』に多く、以後の魏晋期の詩にも多用される。第二類は『詩経』には二例しか見当たらないが、魏晋期の詩には少なくない。

そして第三類は、詩の初聯や換韻後の初聯には『詩経』以来間々見られるが、「登江中孤嶼」詩のように、中間の五、六句目という初聯でない箇所に現れるのは稀少である。とくに頂真格の語が「孤嶼」のように一字でなく二字である場合は、『詩経』に皆無であり、以後も、「古詩為焦仲卿妻作」（2 世紀頃）、曹植（192～232）「贈徐幹」、郭遐周「贈嵇康」（3 世紀中頃）の三例しか見当たらない。謝霊運詩にも、異文「亂流趨孤嶼、孤嶼媚中川」以外は皆無である。

つまり「亂流趨孤嶼、孤嶼媚中川」の修辞は、決して梁氏のいうように「常有」ではない。しかも例外的な上記三例においては、頂真格の聯の直後に場面転換が起こっている。その理由と、詩の中間部分に一字の頂真格なら置かれ得る理由は、下記「5.」に挙げた⑩の論文に、考察を記してある。

さてそれでは、「登江中孤嶼」詩の第五、六句直後に場面転換が起こっているかが問題となる。この点は、謝霊運の思想的背景や先述した（3）の論点とともに、2 年目の 2016 年と 3 年目の 2017 年に検討した。

清代の陳祚明（1623～1674）、何焯（1661～1722）、沈徳潜（1637～1769）らは、「亂流趨孤嶼、孤嶼媚中川」ではなく「亂流趨正絶、孤嶼媚中川」で読み、六句目の直後ではなく、五句目と六句目のただ中に、場面転換を見出す。実際、「登江中孤嶼」全十四句は、そのうちの十二句がすべて対偶をなすが、五句目が「正絶」であれ「孤嶼」であれ、五句目と六句目のみが対偶ではない。五句目と六句目の間には一種の断絶がある。

また「正絶」であれば、それは『爾雅』の「正に絶（わた）る」を典故とする。これは「連用修飾語＋述語」の文構造を持つ。ところが「亂流趨正絶」の「正絶」は「趨」の客語であるから、この句は、斯波六郎（1894～1959）や鄭騫（1906～1991）が指摘するとおり、「すなお」でなく「杆格難通」で、読みにくい。しかし謝霊運の他の詩賦では、原典で述語である語が、客語として用いられている例が相当数ある。つまり、謝詩はそもそも「杆格難通」で「すなお」ではないのである。

他方、謝詩はまた、「杆格難通」の詩句群の中に、際だって澄明で平易な句をちりばめることがある。上の「亂流趨正絶」に続く「孤嶼媚中川」、さらにそれに続く「雲日相輝映、空水共澄鮮」はその最たるものである。つまり「正絶」の異文で読むならば、「亂流」聯は、ごつごつした「杆格難通」の句と澄みきった優美な句が共存するという、謝詩の際だった個性が凝縮した詩句となるのである。

さらに沈徳潜は、「正絶」から、謝霊運が改訳した南本涅槃経の一節を連想しているふしがある。その一節を契機に、「登江中孤嶼」詩は、危機のさなかにある人物が「常楽涅槃」の彼岸へと渡る物語に、重ねて読むことができる。

以上のように、「正絶」「孤嶼」という二つの異文のどちらを採れば、いかなる読みが可能であるかを、ある程度明らかにした。また、歴代「正絶」を支持してきた読み手たちが、謝霊運詩賦をいかに読もうとしてきたか、それがどの程度妥当であるか、が推測できた。さらに、読み手たちの評語を丁寧に読み解けば、謝霊運詩を仏教の物語と関連づける読みが、古くから行われていたことが、分かった。

古典詩文のテキストは、異文のどちらかに軍配を挙げる二者択一で決するには、あまりに惜しい。異文それぞれが、豊かな読みの蓄積を内包しているからである。そして文学が読み手の参入を須って成りたつものであるならば、異文を切り捨てずに、それらがどのような学識や感性をもとに、いかなる希求や欲望を伴って読まれてきたかを検討することが必要となろう。そうした読み手たちの言葉の検討を通して、我々は新たな読みの可能性を探ることができる。以上の研究成果を、実感として得ることができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２件）

①佐竹　保子、中国の文学と女性、中国ジェンダー史研究入門、査読有、2018、pp89-107

②齋藤　智寛、『付法蔵伝』とその受容―大住聖窟二十四祖像を例として―、国際禅研究、査読有、創刊号、2018、pp57-73、http://id.nii.ac.jp/1060/00009467/

③齋藤　智寛、禅問答の誕生と公案禅・看話禅への展開、東アジア仏教学術論集―日・韓・中　国際仏教学術大会論文集―、査読無、第６号、2018、pp171-199

④佐竹　保子、「江北曠周旋」の「曠」―謝霊運「江中の孤嶼に登る」詩の読み、東北大學中國語學文學論集、査読無、第 21/22 合併号、2017、pp23-44

⑤佐竹　保子、乱流趨正絶」と「乱流趨孤嶼」―謝霊運「江中の孤嶼に登る」詩の読み―、集刊東洋学、査読有、第 117 号、2017、pp44-63

⑥齋藤　智寛、『首楞厳経』と臨済禅、『臨済録』研究の現在―臨済禅師一一五〇年遠諱記念国際学会論文集、査読無、2017、pp289-312

⑦齋藤　智寛、『大辯邪正経』と『六祖壇経』、古典解釈の東アジア的展開、査読有、2017、pp137-164

⑧齋藤　智寛、『歴代法宝記』考―山居修道と居士仏教―、集刊東洋学、査読有、2016、第 115 号、pp45-64

⑨佐竹　保子、謝霊運詩中的人與物―以詩語「賞」爲線索―、以物觀物：臺灣、東亜與世界的互文脈絡、査読有、2016、pp79-97

⑩佐竹　保子、「亂流趨孤嶼、孤嶼媚中川」の修辞の系譜―同聯内における頂真格、六朝学術学会報、査読有、第 17 集、2016、pp31-18

⑪佐竹　保子、同韻の二聯間における頂真格の修辞―『詩経』から謝霊運まで―、集刊東洋学、査読無、第 114 号、2016、pp109-122

⑫大野　晃嗣、齋藤　智寛、渡辺　健哉、『東北大学附属図書館所蔵中国金石文拓本集：附関連資料』の刊行によせて、東アジア石刻研究、査読無、2015、第６巻、pp1-16

〔学会発表〕（計６件）

①佐竹　保子、「亂流趨正絶」與「亂流趨孤嶼」――讀謝靈運〈登江中孤嶼〉、中央研究院中國文哲研究所「劉宋：多視覚的斷代研究」重點研究計畫「文學記憶」、2018.1

②齋藤　智寛、五代宋初仏教史書閲読札記、首届仏教史論壇―仏教史料与史学工作坊、2017.11

③齋藤　智寛、『付法蔵伝』と隋唐仏教の西天祖師説、「国際禅研究プロジェクト」弟２回研究会（弟Ｉ部会）、2017.7

④齋藤　智寛、禅問答の誕生と公案禅・看話禅への展開、第六回日・韓・中国際仏教学術大会「東アジアにおける禅仏教の思想と意義」、2017.7

⑤佐竹　保子、中国学からの日本にある漢文古典籍の電子データ化についての提言、日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画研究集会「あらたな古典学としてのレテラシー史研究―他分野融合による可能性を求めて―」、2016.9

⑥佐竹　保子、９世紀以前の中国「女流」文学、2015 年度 東北シナ学会 4 月例会、2015.4

〔図書〕（計２件）

①佐竹　保子、講談社、下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注（二）』、2016、p927（pp305-383）

②佐竹　保子、和泉書院、六朝楽府の会（大形徹・狩野雄・釜谷武志・川合安・佐竹保子・佐藤大志・長谷部剛・林香奈・柳川順子・山寺三知）編『『隋書』音楽志訳注』、2016、p551

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
佐竹　保子（SATAKE, Yasuko）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：２０１７０７１４

(2)研究分担者
齋藤　智寛（SAITO, Tomohiro）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：　１０４００２０１

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）